

グループ内外の競争と努力量

宮下 稔規

大阪大学大学院 経済学研究科

現実に見られるグループ間で競争が行われ、なおかつグループ内でも競争が起こっている状況ではどのような効果があるか。本研究はトーナメントのモデルを用いて、グループ間とグループ内の両方でトーナメントを行う状況を分析する。実際にあるグループ（チーム）同士が競争を行なっている状況でまたそのグループの内部でも競争が起こっているという状況は現実でも確認できる。この論文では各プレイヤーはひとつの賞金 W をめぐって競争を行い、1. プレイヤー全員でのトーナメントを行い最大の生産を行った個人が賞金をもらう、2 グループ間での競争で最大の生産を行ったグループの中で最大の生産をした個人が賞金をもらう、の2つの方法を比較することで分析を行った。各プレイヤーはリスク中立的とし、個人の生産は自分の努力量 x_i と確率項 ϵ_i によって決定され、グループの生産は各個人の合計の生産量とした。結果としてグループ内外での競争を行うことで全員でのトーナメントを行うよりも高い努力水準を引き出すことができるとことがわかった。そしてその理由としてグループを作ることで個人の対戦する相手の数が主観的に減るとことが挙げられた。